

大数浄水場送水施設整備（土木・建築）  
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

広瀬遺跡発掘調査報告書

平成25年8月

島本町教育委員会

## 序 文

本町は、町のほぼ中心を西国街道が貫き、南東部を淀川が流れ、水陸交通の要衝として賑わってきました。近年では大阪・京都のベットタウンとしても栄えてきており、また、平成 20 年 3 月には、新しく JR 島本駅が開設され、人口 3 万人を超えるなど、ますます発展を続けています。

平成 25 年度の政策方針では「歴史と文化を大切に自然環境を生かした個性あるまちづくり」を打ち出し、増加する宅地開発とともに新しい遺跡の発見など、本町の歴史に新しいページが加えられてきています。

本書は、平成 25 年 3 月より着手しました、広瀬遺跡にあたる、島本町水道事業が行なう大藪浄水場送水施設建築工事に伴う発掘調査の成果を報告するものです。

今回の調査では、縄文時代の土器や遺構を検出するなど、大きな成果をあげることができ、今後の周辺調査にも大きな期待が寄せられることとなりました。

最後になりましたが、調査にあたりまして、多大なお指導、お協力を賜りました関係諸機関の皆さま、また、発掘調査にご理解いただきました近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお礼を申しあげますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成 25 年 8 月

島本町教育委員会  
教育長 岡本 克己

## 例　　言

1. 本書は、平成 24・25 年度島本町上下水道部が行なう大藪浄水場送水施設整備（土木・建設）工事に伴う埋蔵文化財包蔵地内発掘調査として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した広瀬遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員久保直子を主担当者とし、補佐担当者として㈱文化財サービス大西晃靖が調査を行なった。  
平成 25 年 3 月 11 日に着手し、平成 25 年 8 月 31 日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。（順不同）

【調　　査　　員】 久保　直子　　木村　友紀　　大西　晃靖

【調査補助員】 竹中　充　　竹谷　俊彦

4. 本書の執筆は木村・大西・辻康男が行ない、文責は文末に記した。作成・編集は久保・木村・大西を中心に行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6. 自然科学分析については、バリノ・サーヴェイ㈱に委託した。
7. 現地作業及び整理作業においては、関係機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。

泉　拓良、大阪府文化財保護課、(株)ビーエス三菱、東海アナース(株)

## 凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面 (T. P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土座標第VI系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀大編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 造構記号については、以下の通りである。

NR：自然流路　　SP：ピット　　SK：土坑　　SD：溝

4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

# 目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 はじめに

    第1節 島本町の地理的概要.....1

    第2節 島本町の歴史的環境.....1

第2章 調査の概要

    第1節 調査に至る経緯 .....4

    第2節 調査経過.....5

    第3節 整理作業の経過.....6

第3章 調査の成果

    第1節 基本層序.....7

    第2節 検出遺構

        (1) 第1遺構面.....7

        (2) 第2遺構面.....13

    第3節 出土遺物

        (1) 繩文土器.....16

        (2) 古墳・中世の土器.....16

第4章まとめ.....17

付 論 広瀬遺跡の自然科学分析業務報告.....21

## 図版目次

図版1 1. 調査地遠景 男山方面を望む（西から）

2. 調査地遠景 水無瀬神宮方面を望む（南西から）

図版2 1. 第1遺構面全景（南西から）

2. 第2遺構面全景（南西から）

図版3 1. 第4層掘削後全景（南西から）

2. 第4c層縄文土器出土状況（南から）

- 図版 4 1. 東壁セクション（上部）土層断面（西から）  
2. 東壁セクション（下部）土層断面（北西から）
- 図版 5 1. 南北セクション（北半）土層断面（東から）  
2. 南北セクション（南半）土層断面（東から）
- 図版 6 1. 東西セクション（東半）土層断面（北東から）  
2. 東西セクション（西半）土層断面（北東から）
- 図版 7 1. SK 2 遺物出土状況（北から）  
2. SK 2 土層断面（北から）
- 図版 8 1. NR 1 完掘後（北西から）  
2. NR 1 東セクション土層断面（西から）
- 図版 9 1. NR 1 西セクション土層断面（北西から）  
2. NR 1 南北セクション土層断面（南東から）
- 図版 10 1. SK 3・SP 4（東から）  
2. SK 3 セクション土層断面（東から）
- 図版 11 1. SP 9 土層断面（南から）  
2. SP 10 土層断面（南から）
- 図版 12 1. SK 5 土層断面（南から）  
2. SD 11 土層断面（南から）
- 図版 13 1. 繩文土器  
2. 古墳・古代・中世の土器

## 挿図目次

第1図	島本町内文化財分布図（1/25,000）	3
第2図	調査地位置図（1/2,500）	4
第3図	東壁セクション土層断面図（1/50）	8
第4図	東西セクション土層断面図（1/50）	9
第5図	第1遺構面平面図（1/80）	10
第6図	第2遺構面平面図（1/80）	11
第7図	第4層掘削後平面図（1/80）	12

第8図	NR 1 セクション断面図 (1/50) .....	14
第9図	第1遺構面個別遺構断面図 (1/20) .....	15
第10図	第2遺構面個別遺構断面図 (1/20) .....	15
第11図	出土遺物実測図 .....	16
第12図	分析資料採取地点の柱状図 .....	22
第13図	年代測定結果 .....	23
第14図	遺跡周辺の地形分類図 .....	24

## 付表目次

付表1	出土遺物観察表 .....	18
付表2	放射性炭素年代測定結果 .....	23

## 第1章 はじめに

### 第1節 島本町の地理的概要

大阪府三島郡島本町は、大阪府の北東部に位置する面積 16.78 km<sup>2</sup> の町である。北は京都府京都市右京区、東は乙訓郡大山崎町・長岡京市、東南は八幡市、西は大阪府高槻市、南は淀川を境界として枚方市に隣接している。町の面積の約 7 割を山岳丘陵地が占め、天王山の南側に広がる平坦地に市街地を形成している。標高は一番低い所が淀川で 9 m、一番高い所が釈迦岳で 631 m である。大阪・京都の府境は淀川をへだてて対立する天王山と男山丘陵との間の、地形的に山崎狭隘部と呼ばれる部分を南北に走っている。また、町域の東南部では、京都盆地の南西より流れ出た木津川・宇治川・桂川の三川が合流して淀川となり南流している。

現在、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急京都線といった鉄道や名神高速道路、国道 171 号といった主要幹線道路が平坦地を貫いているが、近現代の交通網の整備以前も、西国街道や西国街道の前身となる山陽道が横断しており、淀川の水運と併せて、水陸両方の交通の要衝として古代より栄えてきた。平成 20 年 3 月には、JR 島本駅が開業し、大阪・京都のベッドタウンとしても発展している。

自然環境の面でも「大沢のすぎ」、「尺代のやまもも」、「若山神社のツブラジイ林」が大阪府天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。町の花となっている「山吹」は実のある珍しい種類で、尺代の山奥や、山吹渓谷の一帯に群生している。また、水無瀬神宮の「離宮の水」は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮にちなんで名付けられたと言われており、昭和 60 年 7 月に、環境庁（現環境省）認定の「名水百選」に大阪府内で唯一選ばれている。

### 第2節 島本町の歴史的環境

島本町には周知の遺跡が多くあるが、以下にその概要を記述する。

国府型ナイフ形石器とチャート製の剥片数点が山崎西遺跡で採集されていることから、島本町において人類が活動を始めた時期は、旧石器時代の頃であったと考えられる。

町の西側に位置する越谷遺跡では、縄文時代後期に相当する土器が出土している。平坦地の中央に位置する広瀬遺跡では、平成 24 年度の調査で縄文時代晩期に相当する土器と竪穴式住居跡を検出している（未報告）。また、越谷遺跡では弥生時代の土器も出土しており、JR 島本駅周辺においても弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。これらのことから、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃まで、人々の生活が途切れることなく町内の広範囲に営まれたと考えられる。

桜井地区の源吾山古墳群と高槻市にまたがる神内古墳群からは、昭和 35 年の名神高速道路建設時に、古墳時代後期の須恵器や鉄器が表面採集された。これらは古墳の副葬品である可能性

が高いと考えられ、付近に古墳や同時期の集落があったことを示している。

昭和 29 年には、町営住宅の宅地造成工事の際、偶然 2 基の瓦窯が発見された。この鈴谷瓦窯跡は、発掘調査時の写真と実測図、出土した瓦が数点残されているが、正確な位置については不明である。他の瓦窯跡の例から考えれば、確認された 2 基だけではなく、周辺に他の窯が築かれていた可能性も十分に考えられる。しかしながら、現在のところ確認はできていない。鈴谷瓦窯跡は、奈良時代に大和の東大寺へ瓦を供給した窯跡ではないかと考えられていた。しかし、現在では窯の構造や出土した瓦の形態・調整方法の特徴から、東大寺建立より 50 年ほど早い飛鳥時代末頃に操業していた窯跡であると考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西に位置する御所ノ平遺跡では、竈付の竪穴式住居跡が 1 基検出されている。この住居跡からは、鈴谷瓦窯跡と同種の瓦や粘土塊が出土しており、鈴谷瓦窯跡に関与した瓦工人の住居跡ではないかと考えられている。

奈良時代には、聖武天皇の発願により水無瀬川の西岸が、「水無瀬荘」として東大寺に施入された。この水無瀬荘は、東大寺正倉院に残る日本最古級の絵図である「摂津国水無瀬絵図」に描かれている荘園として知られている。水無瀬荘跡と隣接する広瀬遺跡でも、8 世紀中頃の倉庫跡と推測されている総柱建物跡を検出しており、水無瀬荘跡と関連性があるものではないかと考えられている。

その後、平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町周辺は水陸の交通上重要な位置を占めるようになっていき、『延喜式』や『土佐日記』、『更級日記』などには、山崎駅や山崎津の賑わう様子が記述されている。西国街道を中心に広がる広瀬遺跡でも、奈良時代から江戸時代までの集落跡が確認されており、広範囲にわたって生活の場が存在していたと考えられる。平安時代初頭には桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れ、貴族や皇族達の遊獵の地として利用されていたようであり、平安時代には貴族の別業や皇族の離宮が多く営まれた。『伊勢物語』には、文徳天皇の第一皇子である惟嵩親王の御殿も水無瀬にあったと記載されているが、広瀬遺跡では、平成 24 年度の調査で、9 世紀後半の建物群が検出されており、惟嵩親王の水無瀬離宮跡と年代が一致し、この建物群は惟嵩親王の水無瀬離宮跡と関係が深いものではないかと考えられている（未報告）。

鎌倉時代になっても、島本町周辺は貴族達に遊獵の地として利用されていたようであり、鎌倉時代初頭には、後鳥羽上皇によって水無瀬離宮が造営された。後鳥羽上皇の水無瀬離宮跡の中心施設は、現在の水無瀬神宮の地に築かれたと考えられているが、広瀬遺跡でも水無瀬離宮跡に関連する建物跡が検出されており、この離宮跡が広範囲にわたって営まれていたことが明らかとなった。

また、延元元年（1336）に足利尊氏の大軍を迎撃つため、楠木正成が京都を発ち、長子で

ある正行に遣訓を残して河内へと引き返らせたと『太平記』に語られるが、その楠公父子が別れた地として、JR島本駅の東側にある国指定史跡「桜井駅跡」(楠木正成伝承地)が広く世に知られている。現在、この場所には楠公父子の別れを顕彰する碑が建てられ、訪れる人が絶えない。また、この場所は奈良時代の和銅4年(704)に京から西国に向かう道筋に設置された駅(うまや)の一つである「大原の駅」が置かれたと考えられていて、交通の要衝地として律令国家の中で重要な役割を果たしていたと思われる。

(木村)



1. 山崎古墳
2. 山崎東遺跡
3. 山崎西遺跡
4. 鈴谷瓦窯跡
5. 御所ノ平遺跡
6. 水無瀬古墳
7. 広瀬遺跡
8. 水無瀬宮跡
9. 桜井御所跡
10. 桜井遺跡
11. 桜井燒窯跡
12. (伝水地) 特宵小侍從墓
13. 桜井駅跡遺跡
14. [国] 史 桜井駅跡 (楠木正成伝承地)
15. 御所池瓦窯跡
16. 越谷遺跡
17. 神内古墳群
18. 広瀬南遺跡
19. [国] 重文 水無瀬神官茶室・客殿
20. [府指] 有文 関大明神社本殿
21. 西国街道
22. [府指] 天 岩山神社ツブラジイ林
23. [府指] 天 尺代のヤマモモ

第1図 島本町内文化財分布図 (1/25,000)

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

本調査事業は、島本町水道事業が行なう大藪浄水場送水施設建築工事に伴う発掘調査である。

調査にあたっては、平成24年10月に埋蔵文化財の届出があり、平成25年2月に試掘調査を実施し、平成25年3月に着手した。今回の発掘調査地は、島本町埋蔵文化財包蔵地の遺跡分布図に示す広瀬遺跡に当たる。広瀬遺跡は、奈良時代から江戸時代にかけての遺跡であると考えられてきたが、平成24年度の発掘調査により平安時代の建物跡を検出するなど、近年続々と新たな時代の遺構を検出している遺跡である。

広瀬遺跡の中には、水無瀬神宮を中心とする水無瀬離宮跡が別に指定されており、その水無瀬神宮から、本調査地は約100m南に位置する。そのため、水無瀬離宮跡に関連する遺構が検出される可能性が十分に考えられた。また、本発掘調査地の西側に隣接する大藪浄水場ろ過池施設の地を、平成21・22年度に2期にわたって発掘調査を行なった。その際、第1造構面では近世の粘土採掘土坑を検出し、第2造構面では縄文土器の出土が見られた。今回の発掘調査においても、それらの続きが検出されることが期待されたため、発掘調査を実施した。

本調査に先んじて平成25年3月4日から、大藪浄水場の南に面する敷地の発掘調査を行なっていたため、南側の敷地の層序・検出遺構・出土遺物を勘案しながら、今回の調査を進めていくこととした。

(木村)



第2図 調査地位置図 (1/2,500)

## 第2節 調査経過

調査は、平成25年3月11日から開始した。調査区の西側から重機掘削を開始し、第1層および第2層の大部分を重機で除去した。重機掘削の後、残った第2層および第3層を人力で掘削した後に、第1遺構面の検出を行なった。第1遺構面では、自然流路（埋没谷か）・土坑・柱穴を検出した。検出した遺構は、掘削・写真撮影および図面作成による記録作業を行なった。図面作成は、壁面断面図・個別遺構断面図は現地で実測し、平面図はトータルステーションにより測点を計測し、現地で図化作業を行なった。図面作成作業に使用する基準点は、VR S測量を実施して現地に基準点を新設した。

第1遺構面の記録作業が終了した後、掘り下げを行ない、第2遺構面の検出作業を行なった。第1遺構面から0.5～0.6m程掘削した段階で、柱穴・溝などを確認したため、この面を第2遺構面として遺構検出を行なった。第2遺構面では、柱穴・土坑・溝を検出した。検出遺構は、第1遺構面と同じく、掘削した後に、写真・図面による記録作業を行なった。

第2遺構面の記録作業を終了した後に、下層確認のため、さらに掘り下げを行なった。掘り下げ時には、断面観察のためセクションを設定した。掘削を行なった結果、第2遺構面より下層では、遺構は検出されなかつたが、掘削した第4層から縄文土器片が出土した。縄文土器を包含する粘質土・シルト層（第4層）を掘削した後、第4層除去後の状況の写真撮影および図面作成による記録作業を行なった。記録作業後にセクションに沿って断割を行ない、堆積状況を確認し、写真撮影および図面作成による記録作業を行なった。また、第4層・第5層・第6層の堆積年代を測定するため、土壤サンプルおよび各層に含まれる炭化物の採取を行なった。全ての記録作業を終了した後、4月19日に機材を撤収して、現地調査を終了した。 (大西)

### 調査日誌抄

- 3月11日 調査開始。機材の搬入。
- 3月12日 調査区の西側から重機掘削を開始。第1層および第2層を掘削。
- 3月13日 重機掘削終了。搅乱掘削を行なう。
- 3月14日 第1遺構面の遺構検出を行なう。搅乱掘削の継続。
- 3月15日 第1遺構面の遺構検出の継続。検出遺構の掘削を行なう。
- 3月18日 第1遺構面検出遺構の断面写真撮影および断面図作成。
- 3月19日 自然流路NR1の掘削。
- 3月21日 NR1西セクションの記録作業。記録後、東西セクションを残し掘削。
- 3月22日 NR1掘削作業の継続。東西セクションの写真撮影および断面図作成。
- 3月25日 NR1完掘作業を行なう。

3月26日 第1遺構面の全景写真撮影に備え、清掃作業を行なう。トータルステーションにより、第1遺構面の測量を行なう。

3月27日 第1遺構面全景写真撮影。撮影後、第4層の掘り下げを開始する。

3月28日 第1遺構面から0.5～0.6m掘り下げた段階で柱穴・土坑等を検出。この面を第2遺構面として遺構検出作業を行なう。

3月29日 引き続き第2遺構面の遺構検出作業を行なう。検出した遺構の掘削を開始。

4月1日 第2遺構面検出遺構の掘削作業を行なう。

4月2日 全景写真撮影に備え、第2遺構面の清掃作業を行なう。第2遺構面検出遺構をトータルステーションで計測。

4月3日 第2遺構面全景写真撮影。撮影後、土層観察用のセクションを設定して断割を行ない、縄文土器包含層（第4層）の堆積状況の確認を行なう。

4月4日 第4層の掘り下げを開始。掘削時に縄文土器片（深鉢底部片）が出土。

4月5日 引き続き第4層を掘り下げる。前日出土した縄文土器片をトータルステーションで位置の計測を行なった後に取上げ。

4月8日 第4b層の掘削終了。第4b層掘削後の状況写真を撮影後、調査区の中央に十字にセクションを設定し、セクションに沿って断割りを開始。

4月9日 セクション沿いの断割りを継続。第4層の埋土の下の粘質土層を基盤層と考えた。後日、この粘質土層は、基盤層ではなく第5層の埋土として扱う。

4月12日 第4c層掘削。縄文土器片が出土。

4月15日 第4d層掘削。掘削時に縄文土器細片が少量出土。

4月16日 第4d層掘削終了。第4e・4f層掘削開始。

4月17日 第4e・4f層掘削の継続。第4e・4f層の掘削を終了し、第5層を検出した。

4月18日 第4層掘削後の写真撮影。高所作業車により撮影した。撮影後、セクション沿いをさらに断割り、断面の観察を行なう。現段階での検出面（第5層上面）は、基盤層ではなく、約0.3m下位の灰色・黄褐色粘質土層（第6層）が基盤層ではないかと推測した。

4月19日 パリノ・サーヴェイ㈱辻氏来訪。第4層～第6層までの堆積状況について意見を伺う。セクション断面の記録終了後に、セクションを除去。本日で現地調査を終了した。

### 第3節 整理作業の経過

整理作業は、平成25年4月22日から5月14日まで、図面整理、写真整理、遺物洗浄、遺物実測を行なった。その後、5月16日から8月9日まで遺構・遺物の図版作成、遺物写真撮影、原稿執筆を行ない、報告書作成作業を実施した。

（大西）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序（第3、4図・図版4、5、6）

基本層序は、6層に大別される。

第1層 現代の耕土層である。褐色粘質土であり、層の厚さは、0.4m前後を測る。

第2層 近世遺物包含層である。砂・マンガンを含む灰黃褐色粘質土であり、層の厚さは0.05～0.15mを測る。

第3層 調査区の南東部に分布する。多量にマンガンを含む灰黃褐色粘質土であり、層の厚さは0.05m前後を測る。

第4層 暗褐色・黃褐色・にぶい黄褐色の色調を呈するシルトおよび極細砂～中粒砂層である。第4層は、土質により、a～fの6層に細分を行なった。a・c層はシルト層、b・d・e・f層はシルトの混じる極細砂～中粒砂層である。最上層の第4a層から最下層の第4f層までの厚さは、1.2mを測る。第1遺構面は、第4a層上面で検出している。上位に堆積するa～d層には縄文土器が含まれ、e層以下には遺物は含まれていない。いずれの層にも、炭化物が少量含まれている。

第5層 0.05m程の厚さを測る黄褐色シルト層（5a層）と、0.15～0.2m前後の厚さを測る褐色・灰黄色シルト層（5b層）の互層で構成される。5a層・5b層ともに粘性が強い。全体の層の厚さは、0.5mを測る。層中に遺物は含まれていないが、炭化物は少量含まれている。また、第5層には、アカホヤとみられる火山ガラスを微量含むテフラが混入している。

第6層 灰黄色・黄褐色を呈する、粘性の強いシルト層である。基盤層であると考えられる。第6層にも、アカホヤとみられる火山ガラスを微量含むテフラが混入している。

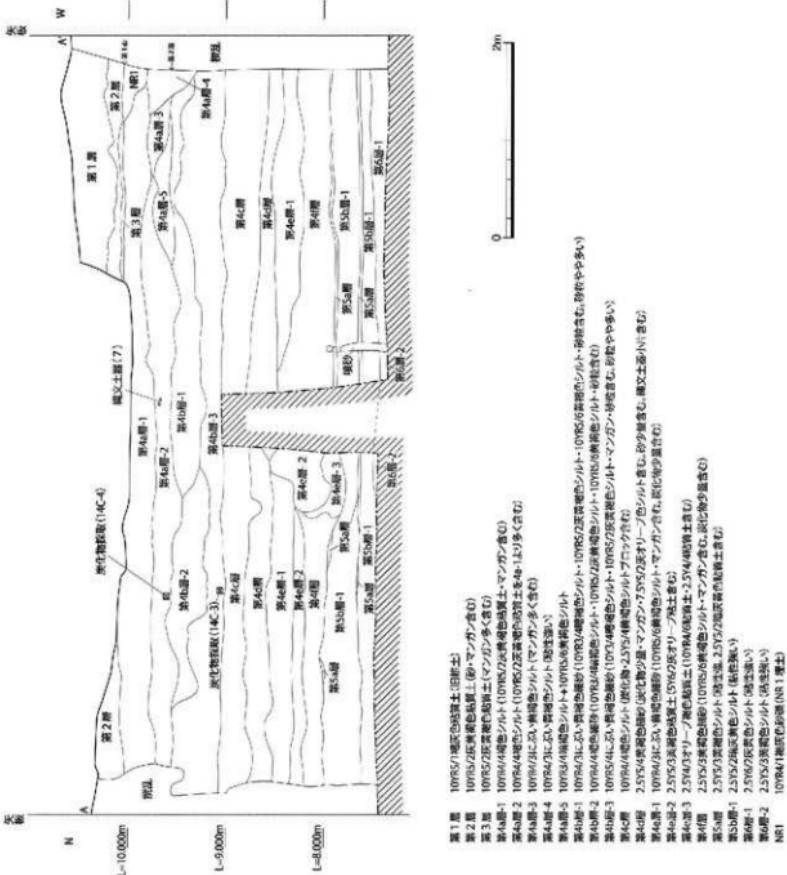
### 第2節 検出遺構

今回の調査では、2面の遺構面を検出した。以下に各遺構面で検出した遺構について記述する。

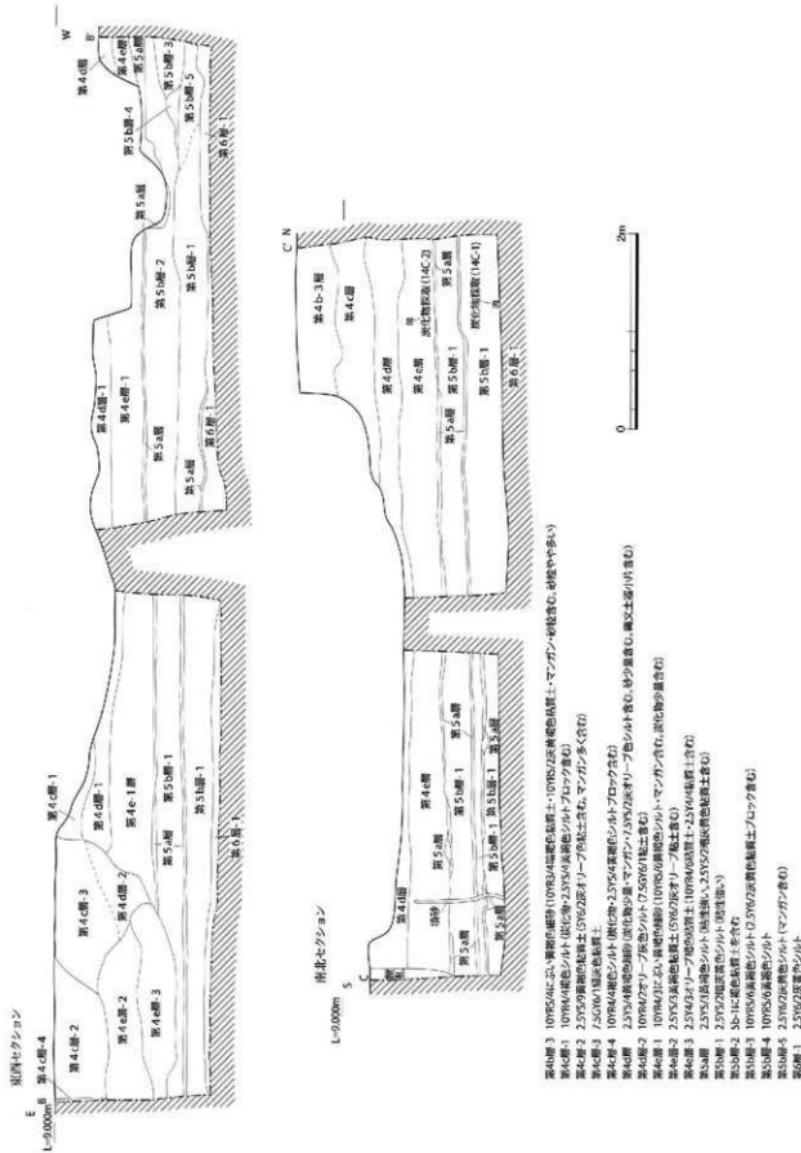
#### （1）第1遺構面（第5、9図・図版2-1）

第4a層上面で検出した遺構面である。第1遺構面では、自然流路、土坑、柱穴を検出した。  
〈自然流路〉

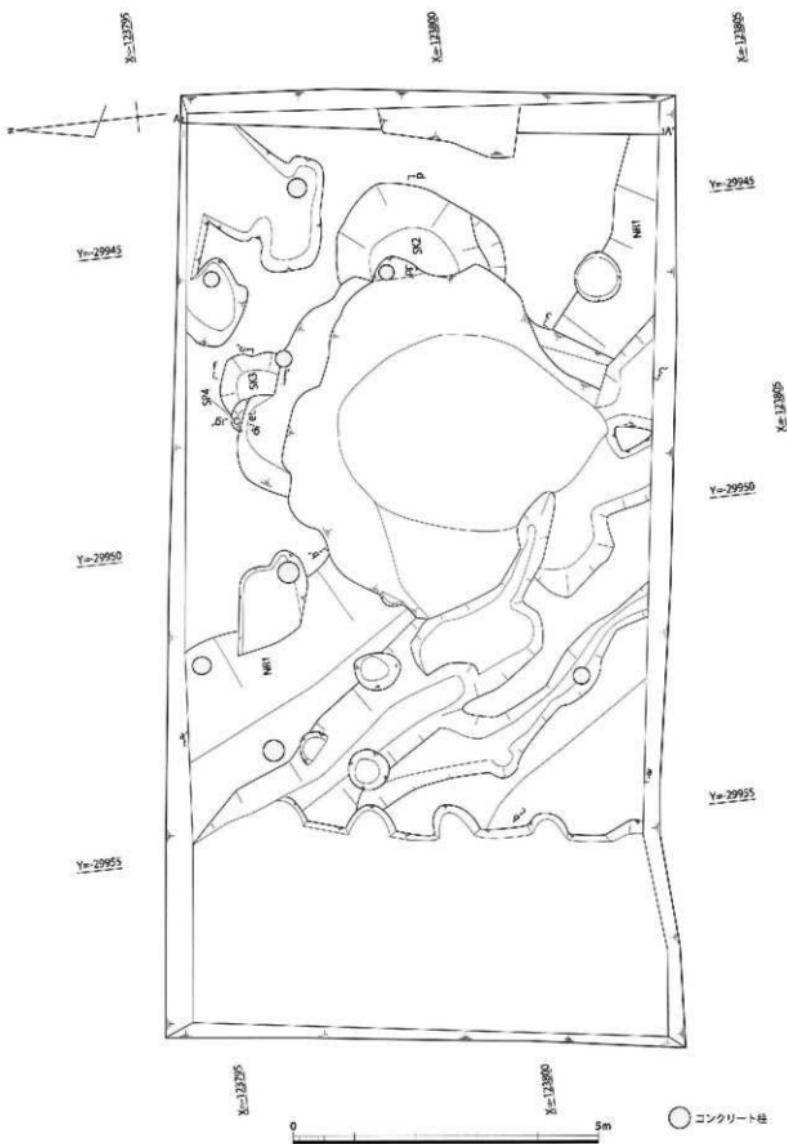
NR1 北西から南東方向の流路である。平成22年調査で検出された自然流路NR1の延長である。流路の西側肩口を検出していなかったため、幅は不明である。深さは、検出面から1.5mを測る。上位には砂質～粘質土が約0.5mの厚さで堆積し、下位には拳大の礫を多く含む砂礫層が堆積する。この堆積状況から、土石流等により周囲を削りながら一気に埋没したと考えられる。NR1は、流路として扱っているが、底面に水の流れていた痕跡は確認できず、自然流路ではなく谷状地形が上石流により埋没した痕跡の可能性も考えられる。埋土から遺物の出土



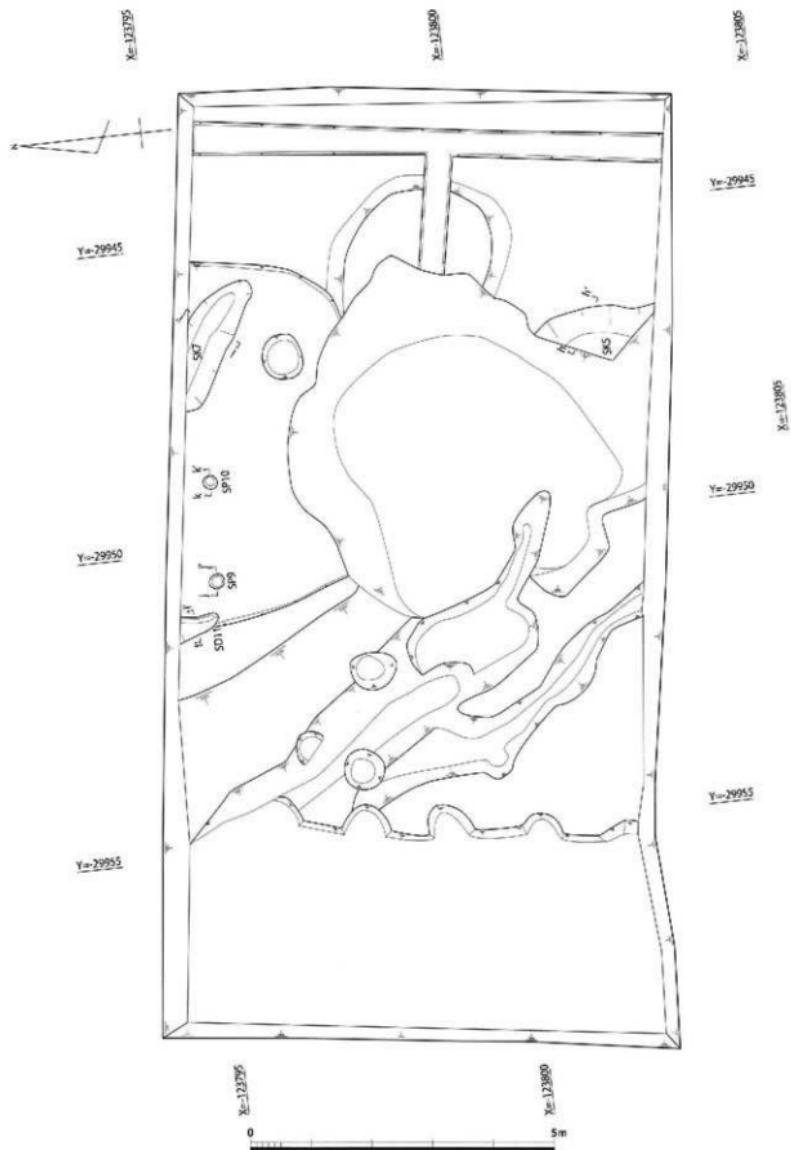
第3図 東壁セクション土層断面図 (1/50)



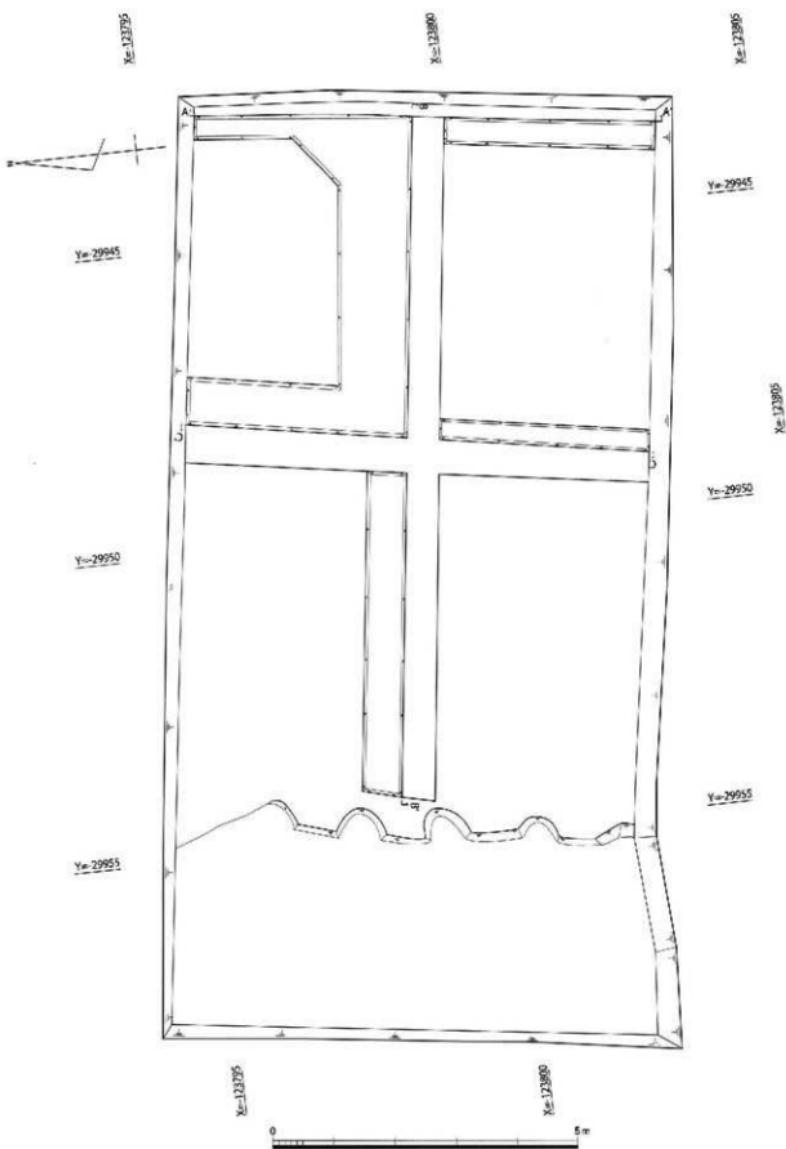
第4図 東西セクション土層断面図 (1/50)



第5図 第1造構面平面図 (1/80)



第6図 第2遺構面平面図 (1/80)



第7図 第4層掘削後平面図 (1/80)

はなく、埋没の時期は不明である。

#### 〈土坑〉

**S K 2** 調査区の東部で検出した平面円形の土坑である。搅乱によって土坑の西側が切られている。南北 2.80 m、深さは 0.31 m を測る。埋土は、上位からマンガン・砂を含む 10 YR 4/3 にぶい黄褐色粘質土、マンガン・砂を含む 10 YR 4/2 灰黄褐色粘質土、マンガン少量・砂・10 YR 4/1 暗灰色粘質土を含む 10 YR 4/2 灰黄褐色粘質土である。SK 2 からは、15 世紀の土師器、陶器が出土した。

**S K 3** 調査区の北部で検出した平面隅丸方形の土坑である。搅乱により南側を切られ、S P 4 に西側を切られている。南北 0.86 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は、砂・マンガンを含む 10 YR 4/3 にぶい黄褐色粘質土である。SK 3 からは、15 世紀の土師器が出土した。

#### 〈柱穴〉

**S P 4** 調査区の北部で検出した平面円形の柱穴である。搅乱により南側半分を切られている。直径 0.55 m、深さ 0.17 m を測る。埋土は 10 YR 4/2 にぶい黄褐色粘質土である。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

### (2) 第2遺構面(第6、10図・図版2-2)

第1遺構面から 0.5 ~ 0.6 m 堀り下げた段階で検出した遺構面である。第4a層および第4b層の一部を掘削した段階で検出した。第2遺構面では、土坑・柱穴・溝を検出した。

#### 〈土坑〉

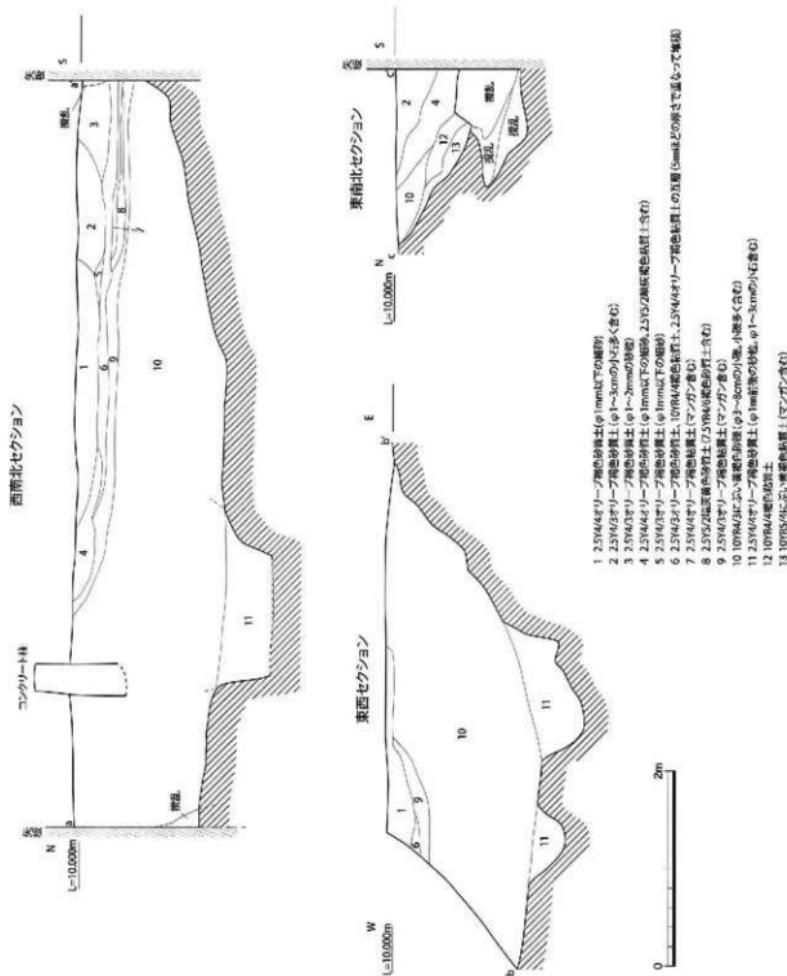
**S K 5** 調査区東部で検出した土坑である。搅乱および自然流路 N R 1 に切られるため平面形や規模は不明である。埋土は、マンガン・細砂を含む 10 YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土である。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

**S K 7** 調査区の北東部で検出した平面橢円形の土坑である。土坑の北側は調査区外に延びる。幅 0.78 m、深さ 0.24 m を測る。埋土は、褐色粘質土を多く含む 5 Y 5/2 灰オリーブ色粘質土である。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。土坑として掘削したが、第4層の埋土が 5 Y 5/2 灰オリーブ色に変質した箇所を土坑として掘削した可能性も考えられる。

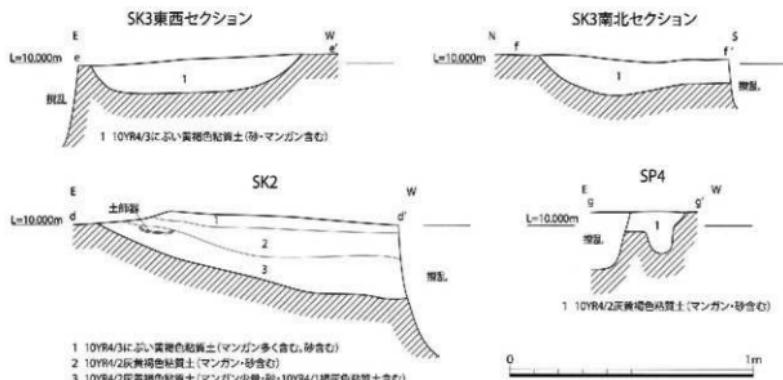
#### 〈柱穴〉

**S P 9** 調査区の北部で検出した平面円形の柱穴である。直径 0.25 m、深さ 0.09 m を測る。埋土は、マンガンを含む 10 YR 4/3 にぶい黄褐色粘質土である。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

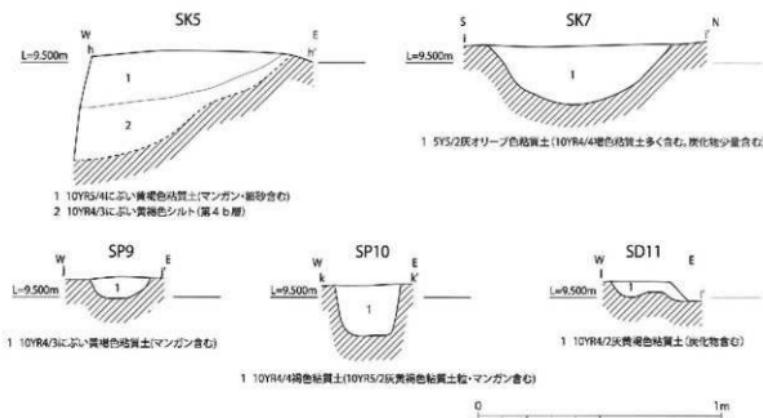
**S P 10** 調査区の北部で検出した平面円形の柱穴である。直径 0.23 m、深さ 0.20 m を測る。埋土は、灰黄褐色粘質土・マンガンを含む 10 YR 4/4 暗褐色粘質土である。遺物の出土はなく、



第8図 NR 1セクション断面図 (1/50)



第9図 第1遺構面個別遺構断面図 (1/20)



第10図 第2遺構面個別遺構断面図 (1/20)

詳細な時期は不明である。

〈溝〉

**S D 11** 調査区の北部で検出した溝状の遺構である。幅 0.32 m、深さ 0.07 mを測る。埋土は、炭化物を含む 10 Y R 4/2 灰黄褐色粘質土である。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。  
(大西)

### 第3節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ1箱分である。縄文・古墳・中世・近世の土器が出土した。近世の遺物は、土師器・陶器・染付があるが、細片のみの出土であるため図示していない。以下に、遺物の報告を行う。

#### (1) 縄文土器 (第11図1~4・図版13-1)

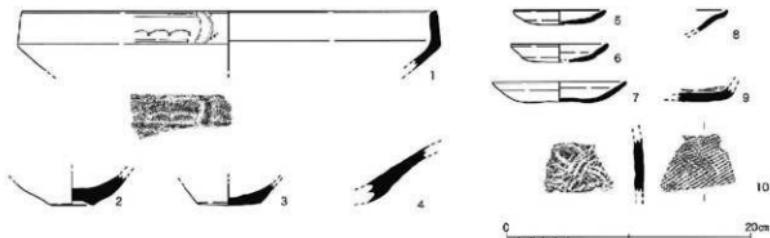
縄文土器は、大半が第4層掘削時に出土し、遺構に伴う遺物は存在しない。器形は、1が浅鉢、2~4が深鉢である。いずれも表面が磨滅し、調整は不明瞭である。1は、浅鉢の口縁部片である。口径は、34.2cmを測る。口縁が内屈する。口縁部に、「ノ」の字状の隆帯が張り付けられ、2条の沈線が廻る。沈線間に、端部を刺突した上限の連弧文が施される。胎土は、淡橙色を呈し、長石が混入する。2~4は、深鉢の底部片である。底部の形状は、2は窪みを持ち、3は平底である。底径は、2が3.75cm、3が5.3cmを測る。4は底部付近の体部片である。いずれも元住吉山式に比定される。

#### (2) 古墳・中世の土器 (第11図5~10・図版13-2)

5~8は土師器の皿である。5・6は、小型の皿である。5が、口径7.6cm・器高1.2cm、6が、口径8.0cm・器高1.5cmを測る。いずれも口縁部が直線的に外に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。底部外面をオサエで整形し、口縁部はヨコナデを施す。7は、口径11.0cm、器高1.7cmを測る皿である。体部から口縁部は直線的に外に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。底部から体部はオサエで整形し、底部内面はナデで調整する。口縁部には、ヨコナデを施す。8は、口縁部片である。小片であるため、口径を復元していない。口縁部はヨコナデにより外反し、口縁端部は上方につまみあげる。5~8の土師器皿は、いずれも15世紀の所産である。

9は、瓦器鍋の底部辺である。小片であるため、底径を復元していない。外面にオサエによる調整痕が残る。内面には、ハケ調整の痕跡が残る。14~15世紀の所産と考えられる。

10は、須恵器壺の体部片である。外面に、格子目タタキを施し、5条単位のカキメを施す。内面は、同心円状のタタキを施す。古墳時代の所産であると考えられる。 (大西)



第11図 出土遺物実測図

## 第4章 まとめ

今回の調査では、2時期の遺構面を検出したが、旧構造物の基礎などによる搅乱のため、調査面積の約2/3程が乱されていた。よって、遺構の残存状況は非常に悪く、検出遺構や出土遺物も非常に少ない。しかし、これまで地山と考えられていた第4層以下の堆積状況の新たな知見を得たことや、第4層の上位層（第4a～4d層）から縄文土器片が出土するといった成果を得ることができた。以下にこれらについて記述し、まとめとしたい。

後述の付論での報告のように、第4層・第5層・第6層は、河川氾濫等により発達した氾濫原の堆積層である。各層の堆積年代を確認するため、各層の土壤サンプルの採取および第4a層・4b層・4c層・第6層から採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行なった。土壤サンプルの精査の結果、第5層および第6層にアカホヤとみられる火山ガラスが微量含まれるテフラの混入が見られた。今回の調査では、アカホヤ火山灰噴出以前のATのみが含まれたテフラの混入する層は確認されなかったことから、第4層・第5層・第6層については、アカホヤ火山灰の噴出年代である7300年前（縄文時代早期）以降の堆積層であることを指摘できる。また、採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、各層より採取した炭化物の年代は、第4a層が縄文時代後期前葉、第4b層が縄文時代中期後半、第4c層が縄文時代中期中頃、第6層が縄文時代前期末という年代が示された。これらのことから、第4層・第5層・第6層は、縄文時代前期末ないしは、それ以前から後期前葉にかけて堆積したと考えられる。

今回の調査では、第4a～4c層から、縄文時代後期中葉（元住吉山II式）の土器片が出土しているが、第4a層・4b層で採取した炭化物の年代は、いずれも出土土器片より古い年代を示している。第4a層で採取した炭化物は、第4a層の最下位に近い位置から採取されていることから、第4a層から出土した土器片は、縄文時代後期前葉以降に発達した氾濫原の堆積土中に埋没した可能性を考えることができる。第4b層・4c層から出土した土器片については、倒木等の何らかの自然要因により、層中に含まれたものであろうか。

島本町内では、本調査地の南西に位置する越谷遺跡において、包含層および溝から縄文時代中期および後期前葉～中葉にかけての土器が多く出土している。平成22年の調査においても縄文土器および石鏃が出土していることから、調査地周辺に縄文時代後期の遺構等が存在する可能性は高いと考えられる。島本町周辺では、長岡市・向日市・大山崎町などにおいて縄文時代の集落跡が確認されており、長岡市下海印寺に位置する伊賀寺遺跡では、今回出土した土器とほぼ同時期の後期中葉（元住吉山II式）の建物跡10棟が確認されている。島本町内においても、今後縄文時代の遺構が確認される可能性は高いと考えられる。また、今回の調査では、これまで地山とされてきた堆積層に、縄文時代後期の土器や炭化物が含まれることを確認した。調査地の周辺地域においても、これまで地山とされてきた堆積層の中に縄文時代の人

間の活動痕跡が存在する可能性を指摘することのできた意義は大きいと考えられる。今後、周辺地域でのさらなる調査成果に期待したい。

(大西)

## 参考文献

島木町教育委員会 2010 『大藪浄水場ろ過池更新工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

島木町埋蔵文化財調査報告書 第16集

島木町教育委員会 1990 『わが町島本 目で見る歴史』

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010 『長岡京跡右京第941次(7AN000-5・

OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告』

京都府遺跡調査報告書 137冊

名神高速道路内遺跡調査会 1996 『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う 水無瀬莊跡遺跡 発掘調査報告書』 名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯

名神高速道路内遺跡調査会 1997 『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う 越谷遺跡 他 発掘調査報告書 伝侍宵小侍從墓・源吾山古墳群』 名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯

加藤晋平・小林達雄・藤本強編 1994 『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣

京都府埋蔵文化財研究会 2010 『第17回 京都府埋蔵文化財研究集会 資料集 京都府の縄文時代～遺跡・遺物はなぜ動くのか～』

付表1 出土遺物観察表

遺物番号	遺構面	出土遺構・層位	種類	器形	法 垂 (cm) ( ) は現存 器高(長) 口径(幅) 志溝(厚)			残存率	図版番号	備考
					深鉢	—	—			
1	2面	第4a層	縄文土器	浅鉢	(4.9)	34.2	—	1/10	13上	
2	2面以降	第4c層	縄文土器	深鉢	(2.8)	—	3.75	1/1	13上	
3	2面	第4層	縄文土器	深鉢	(1.75)	—	5.3	1/6	13上	
4	1面	SK 2	縄文土器	深鉢	(1.65)	—	—	1/5	13上	
5	1面	SK 2	土師器	皿	1.2	7.6	—	1/2	13下	
6	1面	第2層	土師器	皿	1.5	8.0	—	1/4	13下	
7	1面	SK 2	土師器	皿	1.7	11.0	—	1/2	13下	
8	1面	第2層	土師器	皿	(1.75)	—	—	1/10以下	13下	
9	1面	SK 2	瓦器	鍋	(1.3)	7.6	—	1/10以下	13下	
10	1面	SK 2	須恵器	甕	(1.25)	7.8	—	体跡片	13下	

付 論



# 広瀬遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男

## はじめに

本報告では、調査区壁面に累重する堆積層から採取した炭化材片の放射性炭素年代測定に関する自然科学分析結果について述べる。

## 1. 試料

分析試料の採取と調査区壁面の基本層序の断面観察は、調査区の掘削に併せて2回実施した。分析地点は、1地点が1回目の上半部、2地点が2回目の下半部の試料採取地点である。図12に採取試料の位置と柱状図を示す。年代試料と基本層序との関係は、下部から14C-1が6層、14C-2が4e層、14C-3が4b-3層、14C-4が4a層である。標高は、14C-1(6層)がT.P.7.3m、14C-2(4e層)がT.P.8.4m、14C-3(4b-3層)がT.P.9.1m、14C-4(4a層)がT.P.9.8mとなる。

1地点では、調査区北壁断面から14C-4(4a層)と14C-3(4b層上部:4b-3層)の年代試料を採取した。2地点では、14C-2(4e層)と14C-1(6層)の年代試料を採取した。年代試料は、すべて炭化材片である。これらの炭化材片は、非常に微細で樹種同定分の試料を残すことができなかった。そのため、年代試料の炭化材の樹種は不明である。

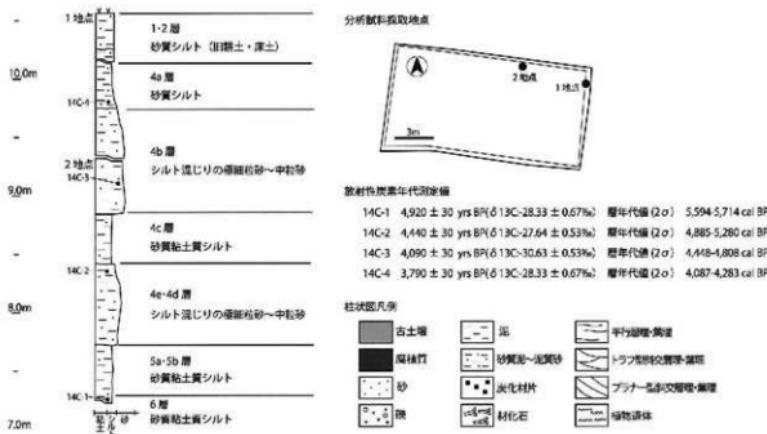
## 2. 分析方法

木炭、炭質物、木材、木片では、試料に土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをメス・ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。

なお、AAA処理でのHClによる酸処理では、通常1mol/l(1M)を用いる。アルカリ処理でのNaOHは、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表記する。

また、腐植については、メス・ピンセットを使い石などの混入物を取り除き、残りの全試料をすりつぶす(Bulk)。酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l(1M)のHClを用い、処理として「HCl」と表記する。

処理を終えた試料については、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で

T<sub>12</sub>  
1.0m

第 12 図 分析資料採取地点の柱状図

加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシユウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて δ<sup>13</sup>C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

### 3. 結果

結果を表 12、図 13 に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、C14-1 が 4,920 ± 30

付表2 放射性炭素年代測定結果

試料	測定地	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	δ <sup>13</sup> C <sub>新Ⅲ</sub> 今し年代	較正用 年代値	曆年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
						e	cal BC	cal BP	5653			
14C-1 樹木 6層	AAA	$4,930 \pm 30$	$-28.33 \pm 0.67$	$4,970 \pm 30$	$4,916 \pm 29$	e	cal BC 3704	cal BC 3657	cal BP 5653	5506	1.069	IAAA-130123
						2 e	cal BC 3763	cal BC 3724	cal BP 5712	- 5573	0.134	
14C-2 樹木 4a層	AAA	$4,440 \pm 30$	$-27.64 \pm 0.62$	$4,490 \pm 30$	$4,444 \pm 28$	e	cal BC 3311	cal BC 3295	cal BP 5200	- 5214	0.684	IAAA-130124
						2 e	cal BC 3296	cal BC 3273	cal BP 5258	- 5224	0.653	
14C-3 樹木 3層	AAA	$4,090 \pm 30$	$-26.63 \pm 0.53$	$4,180 \pm 30$	$4,099 \pm 29$	e	cal BC 3265	cal BC 3259	cal BP 5214	- 5188	0.264	
						2 e	cal BC 3198	cal BC 3053	cal BP 5058	- 4972	0.699	
14C-4 樹木 4a層	AM	$3,790 \pm 30$	$-26.77 \pm 0.37$	$3,820 \pm 30$	$3,791 \pm 28$	e	cal BC 2835	cal BC 2816	cal BP 4784	4765	0.174	IAAA-130125
						2 e	cal BC 2667	cal BC 2577	cal BP 4616	- 4526	0.826	
						2 e	cal BC 2859	cal BC 2830	cal BP 4409	- 4259	0.198	
						cal BC 2751	cal BC 2722	cal BP 4790	- 4671	0.962		
						cal BC 2791	cal BC 2688	cal BP 4650	- 4517	0.702		
						cal BC 2518	cal BC 2198	cal BP 4457	4448	0.038		
						2 e	cal BC 2285	cal BC 2247	cal BP 4234	- 4196	0.457	IAAA-130126
						cal BC 2335	cal BC 2194	cal BP 4186	- 4147	0.416		
						cal BC 2155	cal BC 2181	cal BP 4114	- 4109	0.127		
						2 e	cal BC 2334	cal BC 2322	cal BP 4293	4274	0.040	
						cal BC 2500	cal BC 2128	cal BP 4349	- 4087	0.990		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 e (測定値の 68% を入る範囲) を年代値に換算した誤差。

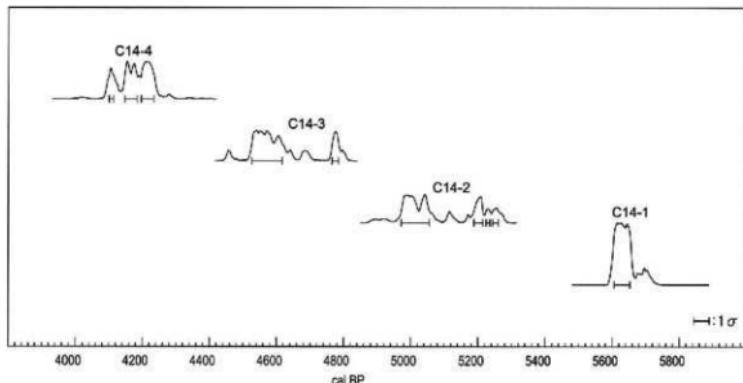
4) 曆年較正には、RADOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.0 (Copyright 1986-2010 © Stauffer and PJ Reimer) を使用。

5) 曆年計算には常に示したためる前の値を使用している。

6) 曆年較正値や相対較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 柄目を失していい。

7) 統計的に真の値が入る確率は e = 68%, 2 e = 95% である。

8) 相対比は、e, 2 e のそれぞれを 1 とした場合、統計的に真の値が存在する比率を割合的に示したものである。



第13図 年代測定結果

yrs BP、C14-2 が  $4,440 \pm 30$  yrs BP、14C-3 が  $4,090 \pm 30$  yrs BP、14C-4 が  $3,720 \pm 30$  yrs BP である。

曆年較正は、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、

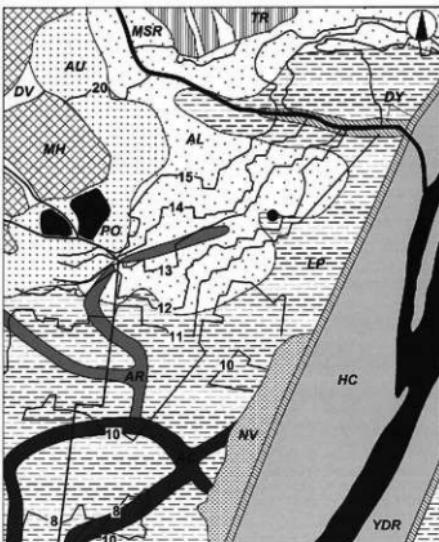
#### 凡例

- MH: 山地・丘陵  
TR: 段丘  
DV: 開析谷  
AU: 沖積扇状地上位面  
AL: 沖積扇状地下位面  
LP: 沖積低地  
NV: 自然堤防  
DY: 人工堤防  
HC: 高水敷  
PO: ため池  
埋没流路痕跡  
AR: 沖積リッジ  
AC: 旧流路  
現流路  
MSR: 水無瀬川  
YDR: 淀川  
● 調査地点

埋没流路痕跡は帯状をなし、沖積リッジが透水性が相対的に良好なことを示唆する明色の凸状、旧流路が透水性が相対的に不良なことを示唆する暗色の凸状のテクスチャを示す。

国土地理院(1975)「治水地形分類図鑑」を基図に、報告者の空中写真判読結果を加えた内容を加え、一部大幅に改変して作製。

500m



第14図 遺跡周辺の地形分類図

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14C</sup>濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14C</sup>の半減期  $5,730 \pm 40$  年）を校正する方法である。暦年校正は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  双方の値を計算する。 $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

暦年校正值は、 $2\sigma$  の場合、<sup>14C-1</sup> が 5,712–5,594 cal BP、<sup>14C-2</sup> が 5,280–4,885 cal BP、<sup>14C-3</sup> が 4,808–4,448 cal BP、<sup>14C-4</sup> が 4,283–4,087 cal BP となる。

谷口（2001）の縄文時代の放射性炭素年代測定の集成にもとづくと、<sup>14C-1</sup> が縄文時代前期末、<sup>14C-2</sup> が縄文時代中期中頃、<sup>14C-3</sup> が縄文時代中期後半、<sup>14C-4</sup> が縄文時代後期前葉に相当する。

#### 4. 考察

今回の調査区では、T.P. 10.3m ~ 10.6m 付近に存在する盛土直下の旧耕作土から、T.P. 7.3m 付近までの現地表面下 3.0m 前後の堆積層を連続的に観察することができた。これらの堆積層からは、最下部から上部まで各層位において、年代試料を採取することができた。

得られた年代値（ $2\sigma$  年代較正値）は、層位的に矛盾がなく、T.P. 7.3m の 14C-1 が約 5,700–5,600 年前、T.P. 8.4m の 14C-2 が約 5,300–4,900 年前、T.P. 9.1m の 14C-3 が約 4,800–4,400 cal 年前、T.P. 9.8m の 14C-4 が約 4,300–4,100 年前となる。これらの年代値は、連続的な堆積をしており、大きなギャップが認められない。

なお、4 層からは、縄文時代後期中葉の元住吉山式の土器が検出されている。4 層に挟在する炭化材片は、下部で縄文時代中期後半、上部で縄文時代後期前葉を示し、出土土器の年代よりも古い年代値を示す。この点については、出土土器と年代値試料のより詳細な層位などをふまえ、今後さらに検討していく必要がある。

上記の年代値を示す調査区の堆積層については、砂質粘土質シルトや砂質シルトからなる相対的に細粒の層準（6 層、5a 層、5b 層、4c 層、4a 層）、シルト混じりの極細粒砂～中粒砂からなる相対的に粗粒の層準（4e 層、4d 層、4b 層）の互層で構成される（図 12）。これら 4a 層から 6 層は、植物の根などによる生物擾乱が層位全体に及んでいるとともに、上位からの鉄分やマンガンの沈着が激しい。そのため、4a 層から 6 層では、詳細な堆積構造を把握することが難しいが、現地での肉眼観察によると、発達不良の不明瞭な平行葉理からなると推定される。

以上の特徴をふまえると、4a 層から 6 层は、流路からの溢流により供給された洪水堆積物のうち、流路近傍に累重した自然堤防堆積物によって基本的に構成されると解釈される。これらの堆積層では、流路による侵食を受けていないとともに、腐植質に富む顕著な土壤発達層準も認められない。このような特徴は、4a 層から 6 層の堆積過程において、年代のギャップを生じさせるような侵食や離水が生じていなかったことを示唆する。

上記のような層相と年代値をふまえると、調査区では、縄文時代前期ないしそれ以前から後期前葉にかけて氾濫原が上方へ発達していくような河川堆積作用が継続していたと考えられる。本調査区の出土土器および近隣の発掘調査成果をふまると、このような氾濫原の発達は、縄文時代晚期頃まで継続していたと推測される。縄文時代晚期以降には、氾濫原への堆積物供給量が減少したことが推定される。これに伴い調査区付近の氾濫原上では、土壤発達が進行したと考えられる。ただし、これに相当する層準は、後世の削平により存在していない。このため、古代以降の検出面については、縄文時代晚期頃に埋積された氾濫原堆積物最上部がその相当層となる。

なお、本調査区は、水無瀬川などが形成した沖積扇状地面と沖積低地の境界部付近に立地している（図 14）。今回認められた堆積層の累重については、後背地の山地・丘陵からの土砂流出によるものなのか、淀川からの供給なのか、現段階で判断できない。また、縄文時代晚期頃に累重が認められなく氾濫原の埋積要因についても不明である。これらについては、今後の周辺での発掘調査において、継続的な地質学的記載を行ない検討していく必要がある。

## 5. 小結

本遺跡での地形発達史や遺跡形成過程について、未だ不明な点が多いものの、今回の発掘および自然科学分析からは、古代以降の遺構検出面の基盤層が、縄文時代前期末ないしそれ以前から晩期にかけて埋積過程にあることと、その上部において縄文時代後期から晩期の遺物が少なからず埋没していることを示すことができた。このことは、淀川沿いの氾濫原や、その近傍の沖積扇状地面において、これまで希薄と考えられていた縄文時代後期から晩期の人間活動痕跡が、これまで地山とされていた堆積層浅層に埋没している可能性が高いことを示唆している。これについては、本遺跡とその周辺部において、このような可能性のある堆積層の分布や、その地形発達要因を明らかにしていくことが今後の課題である。

(辻)

## 引用文献

- 谷口康浩 2001 「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』77 雄山閣

図 版



1. 調査地遠景 男山方面を望む（西から）



2. 調査地遠景 水無瀬神宮方面を望む（南西から）



1. 第1遺構面全景（南西から）



2. 第2遺構面全景（南西から）



1. 第4層掘削後全景（南西から）



2. 第4c層縄文土器出土状況（南から）



1. 東壁セクション（上部）土層断面（西から）



2. 東壁セクション（下部）土層断面（北西から）



1. 南北セクション（北半）土層断面（東から）



2. 南北セクション（南半）土層断面（東から）



1. 東西セクション（東半）土層断面（北東から）



2. 東西セクション（西半）土層断面（北東から）



1. SK 2 遺物出土状況（北から）



2. SK 2 土層断面（北から）



1. NR 1 完掘後（北西から）



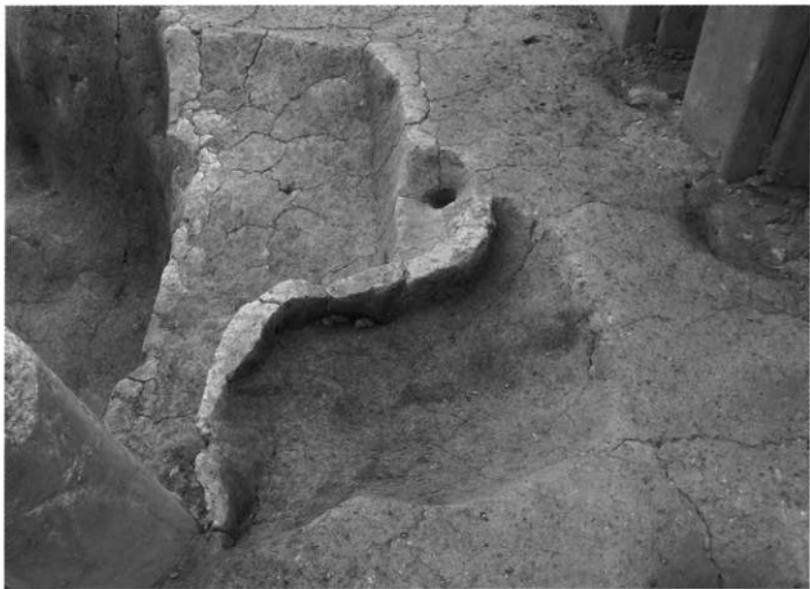
2. NR 1 東セクション土層断面（西から）



1. NR 1 西セクション土層断面（北西から）



2. NR 1 南北セクション土層断面（南東から）



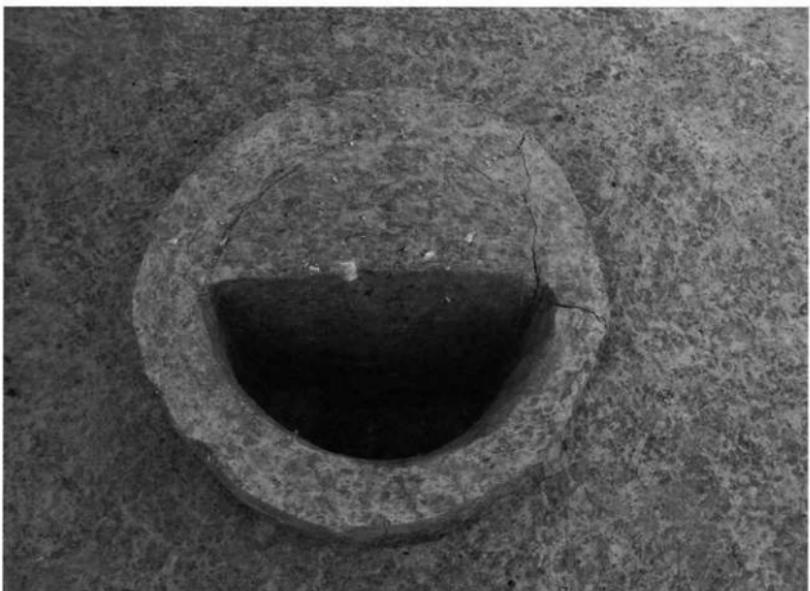
1. SK3・SP4 (東から)



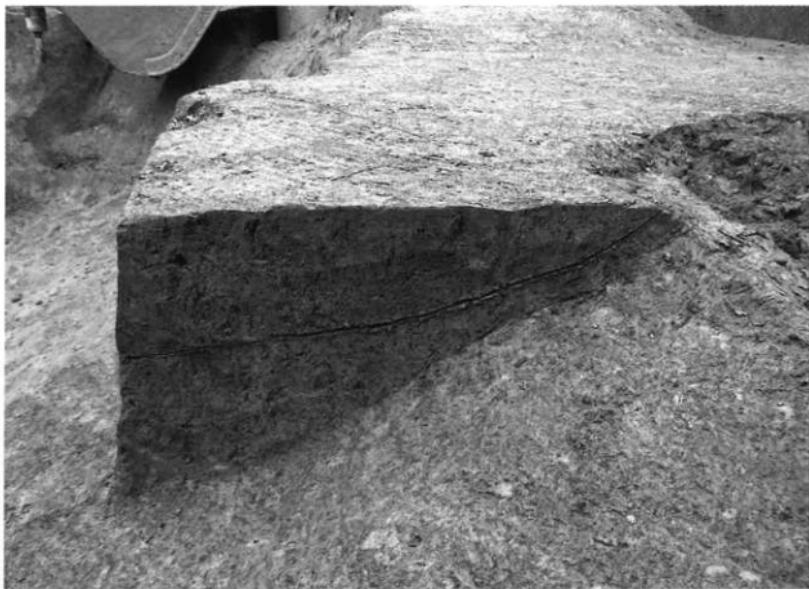
2. SK3セクション土層断面 (東から)



1. S P 9 土層断面（南から）



2. S P 10 土層断面（南から）



1. SK 5 土層断面（南から）



2. SD 11 土層断面（南から）



1



4



2



3

1. 繩文土器



6



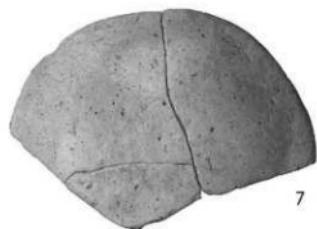
5



8



10



7



9

2. 古墳・古代・中世の土器

# 報告書抄録

ふりがな	おおせんじょうすいじょうそういしせいひ（おおせん・けんちく）こうじにともなうまいぜうぶんかざいはつつつちょうきほうこくしょ
書名	大森浄水場送水施設整備（土木・建築）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	久保直子、木村友紀、大西晃靖
編集機関	島本町教育委員会事務局 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 Tel 075-961-5151
発行年月日	平成25年8月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
広瀬遺跡	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬 三丁目	27301	14	34° 53' 01"	135° 40' 20"	2013.3.11～4.19	127.7	大森浄水場送水 施設整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落	縄文時代 ・室町時代	ピット・溝・自 然流路	縄文土器・土師器・ 須恵器・瓦器・陶 磁器	河川氾濫等による氾 濫原の堆積土層であ る第4層の上位か ら、縄文時代後期の 土器を確認した。
要約		広瀬遺跡は西国街道を中心に広がる縄文時代から江戸時代の集落跡である。古 代には東大寺領の荘園水無瀬荘が営まれ、鎌倉時代に後鳥羽上皇により造営され た水無瀬離宮跡もその範囲に含まれると考えられている。今回の調査では、2面 の遺構面が検出され、第1面で中世の土坑、柱穴、流路跡を検出し、第2面で堆 積土中から縄文時代後期の土器が出土した。また、これまで地山とされていた洪 水堆積物により形成された氾濫原の堆積層から縄文土器が出土したことから、こ れまで希薄とされてきた縄文時代後期～晩期にかけての人間の活動痕跡が調査地 周辺に分布する可能性が高いことを指摘することができた。			

島本町文化財調査報告書 第24集

**大歎浄水場送水施設整備（土木・建築）  
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
広瀬遺跡発掘調査報告書**

発 行 島本町教育委員会  
〒 618 - 8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目 1 番 1 号  
Tel 075 - 961 - 5151

発行日 平成 25 年 8 月 31 日

印 刷 三星商事印刷株式会社  
〒 604 - 0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル介財天町 300  
Tel 075 - 256 - 0961

